

もくじ

▽新学会長のあいさつ	9
▽新役員の紹介	10
▽大会案内	11
▽私の生理人類学	12
▽国際会議	13
▽学会動静	14
▽ from Editors	15

新学会長のあいさつ

安河内 朗



平成 29 年度 4 月より日本生理人類学会の会長に就任しました安河内 朗です。1978 年に生理人類学の組織的活動母体として誕生した「生理人類学懇話会」から来年で 40 周年を迎えます。その節目を前に身の引き締まる思いです。この約 40 年を振り返り、当時の皆さまの初心と意気込みの精神を尊重しつつ、これからの学会の発展に少しでも寄与できればと思います。

生理人類学懇話会ができる 2 年前には、日本人類学会において生理人類学分科会の設立を申請したことがあります。このときの名簿には、わずか 51 名の賛同者があるに過ぎませんでした。しかしながら、懇話会設立の 10 年後には学会員数は 405 名となり、さらに 10 年後の 1998 年には 808 名と倍増しました。

最初の 10 年間の会員増加は、年 2 回の大会、「おむすびとビール会」(1979 年)として始まった現在の「若手の会」、生理人類誌 (*Annals of Physiological Anthropology*) の創刊 (1983 年) による年 4 回の刊行などにより、主として大学関係者の入会が促進されたものです。生理人類学は、700 万年におよぶ人類史を踏まえつつ、その間の環境への適応によって築かれた生物学的特徴を基盤として現代に生きる私たちを科学し、現在および未来の生活環境、ひいては地球環境を視野にいた

改善や維持に貢献しようとするものです。1884 年、若干 21 歳の帝大生、坪井正五郎氏が糾合した「じんるいがくのとも」が、やがて 2 年後に日本人類学会の発足にいたります。そのとき彼は「ゆくゆくは人類に関する自然の理を明らかにする」という考えを述べました。これはまさに生理人類学の基本路線につながるものと言えます。坪井氏の時代には“人類学”という学問は存在しませんでした。そこで人類を科学するため、動物学、地質学、化学、物理学などの多岐にわたる専門の研究者を糾合したのです。生理人類学会会員の専門領域も、公衆衛生学、脳科学、認知科学、生物学、遺伝学、栄養学、建築学、生活科学、環境科学、スポーツ科学、労働科学など、すべてあげきれないほどの多岐に及びます。人類を科学するには、あらゆる分野の専門家が総がかりで取り組まねばならない学問と言えます。しかしながら生理人類学は、ヒトの生物学的特徴を明らかにする基礎研究のみでなく、ヒトが人として生活する環境との関係性にもおよび、そこから具体的な環境改善に貢献するための応用研究も必要としています。したがって応用研究を促進するために、私たちの生活環境の構成物を供給している産業界との共同研究も重要になります。

さて次の 10 年の活動が、まさにその企業会員の増員にかかわってきます。それは、1988 年から企業の方々を対象に始まったセミナーや情報交換会です。セミナーのテーマは、「オフィス・アメニティ」、「快適性をはかる - 総論 -」、「戦略としての生活文化」、「すまいのアメニティ」、「人工環境の快適性と健康度」、「感性科学と生活」な

どであり、三十数回の開催におよびました。また1992年に始まった「快適性研究部会」や「感性科学研究部会」などの10を越える研究部会も多く、企業の増員につながりました。1999年に始まったPAデザイン賞は、企業との共同研究の質を担保する表彰ともいえます。

このように生理人類学はその黎明期の基礎研究から、特に物理的環境適応能の研究成果を社会に還元する応用研究への広がりへと努力が積み重ねられました。この時代は同時に生理人類学の国際展開の時期とも重なります。実験室実験における精査な研究成果に基づいた現代生活やライフスタイルの改善にかかわる社会貢献のあり方は、世界の人類学をみても日本の生理人類学のみであり、したがって国際生理人類学会議の開催も世界各地で歓迎されることとなります。第1回国際生理人類学会議は、1991年にまずは東京で開催されました。その後第2回は1994年にドイツのキール大学でユルゲンス教授が開催しますが、その後は2年ごとに開かれています。今年も第13回目を迎え、英国のラフボロー大学でBarry Bogin教授が9月に開催します。また不定期ではありますが、国際大会の合間に海外の学会や大学を相手にジョイントの大会やシンポジウムといった、いわば他流試合も盛んに行われるようになりました。最初は1995年にソウル大学で第1回日韓ジョイントシンポジウムが開催されています。相手は韓国生活科学会、2年後の第2回では韓国の建築系学会との間で開催(千葉大学)されています。2005年にはモスクワ大学250周年記念事業の一環としてジョイントが、2007年には英国の生物人類学会とのジョイントがケンブリッジ大学でそれぞれ開催されました。近年ではアジアへの生理人類学の展開が積極的に試みられています。2011年に北京科技大学において“Usability & Human-centered Design Joint-workshop”のテーマで開催されたのを皮切りに、その3年後に合把市でも開催されました。2015年に科学研究費補助金の、オープンアクセスジャーナルを支援する国際情報発信強化助成Bが採択されてからは、昨年のマレーシア、韓国に続き、今年もタイ(5月)とインドネシア(11月)での各開催が予定されています。

会員数が800名に達した後はほぼ均衡を保っており、この時期は生理人類学の学問としての体系化が図られるなど、成熟に向けた時期といえます。

2002年には、永年の懸案だった文部科学省科学研究費補助金の分科「人類学」に「生理人類学」の細目が新設されました。同時に「環境適応能」、「生理的多型性」、「全身的協働」、「機能的潜在性」、「テクノアダプタビリティ」のキーワードが設定されました。以降、年次大会などでこのキーワードに関するシンポジウムが開催され、議論が重ねられています。これらの一連のキーワードの解釈や定義は、新たな知見や考え方が付加されていく中で時代とともに成長していくものと思います。

これまでのイベントで印象的だったのは、2007年のCambridge大学でのジョイントのテーマ“Human Variation: From the Laboratory to the Field”です。私たちはフィールド研究との関わりについて、新たなチャレンジに挑む必要があるでしょう。欧米の生物人類学が得意とするのはフィールド研究です。一方日本の生理人類学が得意とするのは実験室における厳格な環境制御下の研究です。この両者がお互いに不足するものを補完し合い協働していくか、あるいは生理人類学がこれまでの基礎研究の延長上に独自のフィールド研究の方法を構築していくことが重要になると思います。

これからの日本生理人類学会は、これまでの会員の皆さんの弛みない努力とその精神を踏襲しつつ、さらなるチャレンジを目指します。皆さまとともに一緒に学会を盛り上げたいと思います。どうぞご協力を心からお願い申し上げます。

新役員紹介

先に実施された評議員選挙、理事選挙、会長選挙の結果、平成29年度第1回理事会において2017-2018年度の役員が承認されました。以下に新役員を紹介いたします。(敬称略)

会 長	安河内 朗	九州大学
副会長	岩 永 光 一	千葉大学
理 事		
総 務	石 橋 圭 太	千葉大学
	劉 欣 欣	労働安全衛生総合研究所
広報・会員拡大	前 田 享 史	九州大学
	福 岡 義 之	同志社大学
企画・戦略	樋 口 重 和	九州大学

財務・企画	甲田 勝康	近畿大学
	仲村 匡司	京都大学
英文誌	中村 晴信	神戸大学
和文誌	村木 里志	九州大学
和文誌(会報)	安陪大治郎	九州産業大学
国 際	原 田 一	東北工業大学
	山内 太郎	北海道大学
	恒次 祐子	森林総合研究所
研究戦略	工藤 奨	九州大学
	北村 真吾	国立精神・神経医療研究センター
研究部会	若林 斉	北海道大学
	西村 貴孝	長崎大学
ホームページ	小林 宏光	石川県立看護大学
	下村 義弘	千葉大学
PA デザイン	岡田 明	大阪市立大学
	向江 秀之	豊田中央研究所
資格認定	山崎 和彦	実践女子大学
	綿貫 茂喜	九州大学
倫 理	青柳 潔	長崎大学
	井上 芳光	大阪国際大学
大 会	草野 洋介	長崎女子短期大学
	小崎 智照	福岡女子大学
アドバイザーボード	勝浦 哲夫	千葉大学
	太田 博樹	北里大学
監事候補者	元村 祐貴	九州大学
	高倉 潤也	国立環境研究所

(監事は6月25日の総会で承認の予定です)

く予定です。発達障害の視点から人類の主流派である定型発達の特徴を明白にしようとする試みは、生理人類学のさらなる発展の道筋になると思います。

多くの方が京都に集い、それぞれの研究を紹介し、触れることによって、新たな創造に結びつく機会となりますよう、実行委員は全力を込めて準備していく所存です。

さて、11月の京都というと、紅葉がきれいかもと期待される方がおられるかもしれませんが、最近では、まだ紅葉の季節としては少し早い印象です。しかし、穏やかな気候なので、国内外からのたくさんの観光客で京都の町はあふれていることが予想されます。宿の予約はお早めにお願いします。京都市内での宿の確保が難しい場合は、大津市(滋賀県)や大阪市(大阪府)を含む京阪電鉄沿線まで広げてご検討ください。

会 期：2017年11月18日(土)・19日(日)

会 場：京都大学医学部創立百周年記念施設
芝蘭会館(稲盛・山内ホール)

アクセス <http://www.med.kyoto-u.ac.jp/shiran/kotsu/>
京阪電鉄出町柳駅から徒歩約15分

懇 親 会：カフェレストラン カンフォーラ
(京都大学本部構内)

※詳細は今後学会ホームページ、PANews、電子メール等でお知らせいたします。



芝蘭会館外観

稲森ホール(口頭発表)

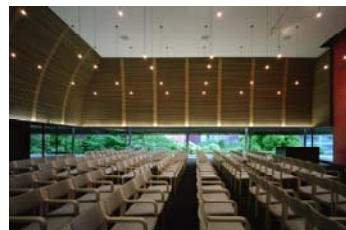
【大会案内】

第76回大会のご案内(第1報)

大会長 若村智子(京都大学)

2017年秋、11月18日(土)・19日(日)に京都大学で開催される日本生理人類学会第76回大会についてお知らせいたします。

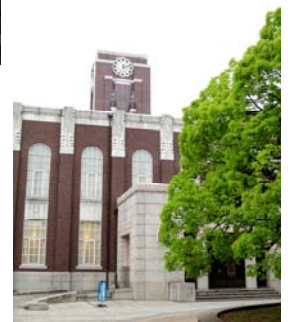
京都での大会は、1987年、2013年に引き続き、3回目の開催になります。今大会の特別講演では、児童精神医学の専門家で、特に発達障害の認知機能に関する造詣が深い、京都大学教授の十一元三先生に、自閉症スペクトラムの概説をしていただ



山内ホール(ポスター発表)



カンフォーラ(懇親会)



時計台とクスノキ

【私の生理人類学】

モノづくりの視点から

岡田 明(大阪市立大学)

錚々たる方々が執筆されているこのコーナー。生理人類学の分野で大した貢献もせず様々な分野をふらふら渡り歩いてきた者が担当するのはあまりにも恐れ多いことである。それゆえ、敢えて少し離れた視点からこの分野についての思いや期待を述べさせていただくことにした。

実は、生理人類学会との関わりは長い。もともと工業デザインを学んでいたが、修士院生の頃、当時人間工学研究室の指導教官だった菊池安行先生の誘いで、その頃まだ学会として独立していなかった生理人類学の活動や研究発表に参加したのがきっかけだった。佐藤方彦先生をはじめ今や重鎮の方々の多くとその時お会いし、強烈な印象を受けたことを鮮明に覚えている。そして、同じく院生だった現会長の安河内 朗先生の発案で「おむすびとビールの会」なる若手研究者の会を結成し、機関紙「独楽」を発行するなど、今思い起こしてみるとあらためて時の流れの速さに愕然とする。

修士修了後は他大学医学部の研究室で脳研究にどっぷり浸ることになったが、菊池先生の計らいで週に一度は母校の研究室に戻り、その頃来られた前会長の勝浦哲夫先生と温熱生理の研究も一緒にさせていただいたことはとても良い経験となった。その後、母校に戻り、さらに現職の大学に移籍し現在に至っている。という訳で、デザインから基礎医学まで、様々な領域の勉強や経験をさせていただいた次第である。その間、一貫してモノづくりをサポートするためのヒトの生理的・心理的特性の理解を中心に研究・教育を進めてきた。(なお、ここでいう"モノ"はいわゆる物だけでなく情報やシステムなどヒトがつくり出すあらゆる対象を指す言葉として用いた。)

人間中心のモノづくりはヒトの特性を理解するのはもちろん、その時代や社会、技術やコスト等に応じて考えなければならない結構泥臭い分野でもある。それをサポートする領域は数多くある。医学然り、心理学然り、工学然り…どの分野もそれなりの手法、視点、目標を持っており、それぞれが何らかの形で貢献している。その中で、生理人類学はモノづくりそのものとは一線を画すが、



九州芸工大にて(1979年)

モノづくりが直面する課題の解決に大きな影響を与え得る視点を持っている。それを述べることで、ここでのまとめとしたい。

まず第1の課題がストレスと機能低下の矛盾の回避である。ここで述べるストレスとは、外界から来るストレスに屈せぬよう心や体がある程度抵抗している状態である。悪いのは強度の疲労や疾患の要因となる過度なストレスであり、適度なストレスはむしろ心身に有益となり得る。さらに、適度なストレスが続くことにより、やがてその状態に心身が適応していく。逆にストレスが低下あるいは消えてしまえば、心身の抵抗力も低下する。これもひとつの適応といえるかもしれない。その様な前提でこれまで追求してきたモノを考えると、その多くはストレスが少なく、その場その時が楽であれば良しとする刹那主義的なモノといえる。もちろん、ひとつのモノだけで機能低下が生じるような矛盾が起こることはないが、たとえば高齢者に優しい環境づくりが加齢による機能低下を早めたり、ストレスが弱まることにより子どもの心や体が健康に成長するかを考えてみなければならない。その課題解決の糸口として、モノを“いかにつくるか”だけでなく“いかに使うか”を考えることもより重要になるだろう。

第2の課題は“長期持続型トータルデザイン”である。モノづくりでは、これまで個々の道具や空間など単体としての使いやすさや快適性が評価されてきた。しかし、モノはその周囲の環境との相互作用と時間的継続の中で使われる。その長期的で複合的なヒトへの影響の考慮が欠けていたといえる。私たちが目指すのは、そのモノ自体の質の向上だけでなく、ユーザ自身も含めた“用いる

場”全体を長きに渡り良くしていくことにある。

生理人類学は、ヒトとは何か、その真理を追究していく科学であり、モノづくりを支える他の分野では扱わないような長い時間軸と広い空間軸でヒトを捉えていこうとする。また、単一の機能だけでなく幾重にも複合した生理システムとしてのヒトを考慮に入れている。その視点こそ、こうしたモノづくりの課題に対するより良い解答に導いてくれるものと期待している。その一翼を担えればと思う。

【国際会議】

第 13 回国際生理人類学会議 “Human Biology of Climate Change”

国際担当理事

恒次祐子, 原田 一, 山内太郎

以下のように第 13 回国際生理人類学会議が開催されます。今回の会議は国際生理人類学連合 (International Association of Physiological Anthropology) とイギリス Society for the Study of Human Biology との共催により開催される予定です。

皆様のご参加を心よりお待ちしております。

会議概要

会議長：Barry Bogin 教授(Loughborough 大学)

会 期：2017 年 9 月 12 日～9 月 15 日

場 所：Ramada Loughborough Hotel



<https://www.wyndhamhotels.com/ramada>

メインテーマ：

Human Biology of Climate Change

大会ウェブサイト：

<http://www.sshb.org/future-meetings/2017symposium/>

アブストラクト

締切は 2017 年 5 月 31 日です。最大 300 語です。以下のオンラインフォームからご提出ください。

<http://www.sshb.org/sshb-2017-abstract-submission-guidelines/>

参加登録

締切は 2017 年 7 月 28 日です。

Loughborough 大学の以下のサイトから必要事項を入力してご登録ください。

<http://store.lboro.ac.uk/conferences-and-events/school-of-sport-exercise-and-health-sciences/upcoming-events/human-biology-of-climate-change-2017>
クレジットカードの利用が可能です。

参加費は以下の通りです。

学 生：75 ポンド

会 員：150 ポンド

非会員：200 ポンド

1 日参加：50 ポンド

参加費はランチ(1 日参加の場合は 1 日分)とテーブルイクを含みます。

会議公式ディナーは上記参加費には含まれず、学生 15 ポンド、会員・非会員は 30 ポンドです。

宿泊

会場の Ramada Loughborough Hotel に宿泊を希望される方は、会議専用予約コード【SSHBRL】を記載の上、以下のメールアドレスから宿泊予約をお申込みください。シングルルーム (朝食付き) 65 ポンド、ダブルルーム (朝食付き) 75 ポンドです。

Ramada Loughborough Hotel :

reception@ramadaloughborough.com

ラフバラへの交通

ラフバラはロンドンから電車で 1 時間半ほど、バーミンガムから 1 時間、マンチェスターやリーズからは 2 時間ほどの場所にあります。ヒースロー空港から長距離バス、または一度ロンドンのセント・パンクラス駅に出てから電車 (East Midlands Train) で行くことができます。

お問い合わせ

ご不明なことがありましたら大会事務局または日本生理人類学会国際担当までご連絡下さい。

大会事務局 SSHB2017@lboro.ac.uk

国際担当理事

恒次祐子(森林総合研究所)

029-829-8310, yukot@ffpri.affrc.go.jp

原田一(東北工業大学)h-harada@tohtech.ac.jp

山内太郎(北海道大学)taroy@med.hokudai.ac.jp

【学会動静】

□大会予定

- ・ 第 75 回大会 : 2017/6/24-25, 千葉大学
- ・ 第 76 回大会 : 2017/11/18-19, 京都大学
- ・ 第 77 回大会 : 2018 年春, 九州大学
- ・ 第 78 回大会 : 2018 年秋, 東京大学

from Editors

次号 No.3 の原稿締切は 2017 年 8 月 1 日です

▽過去 6 年間、会報‘専任’理事として活動してきました。本年度からは和文誌・会報理事という新たな肩書きを拝命しましたので、これからも継続して PANews の編集に携わることになりました。2015-2016 年度は仲村匡司理事と御一緒させて頂きましたが、仲村理事は財務・企画理事へと配置換えのため、次号から一人で編集することになります。少々不安を感じておりますが、これからも宜しくお願い申し上げます。(安陪)

▽私ごとですが、今期より財務・企画担当理事を拝命し、PANews の編集・発行から離れることになりました。バックナンバーを紐解くと、2003 年の 4 号（当時は年 6 回発行）あたりから、学会のウェブサイト担当になって抜けた時期もありましたが、10 年間くらい PANews に関わってきたようです。この間、誌面の刷新や新しい記事の企画など、色々携わることが出来ました。年 4 回発行に移行したあたりから、速報性の担保と印刷費用の節約のために、PANews をメールマガジンやウェブマガジンに切り替えることも模索しておりました。これを任期中に果たせなかったことが少々心残りです。(仲村)

▽ PANews 編集事務局

安陪大治郎 九州産業大学 健康・スポーツ科学センター
メールアドレス panews@jspa.net

※原稿、お問い合わせなどはこのメールアドレス宛にお送りください。